# 身に杭、アヒルの仔

四二ヶ三　十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
身に杭、アヒルの仔

【Ｎコード】
Ｎ４７０５Ｋ

【作者名】
四二ヶ三　十三

【あらすじ】
土曜日。
疲れた。私は『疲』の字が何故『やまいだれ』なのかを知っている。疲労していることは立派な病気だからだ。
思えば、幼馴染である敦賀（つるが）が亡くなってからまだ半日も経っていない。しかし、この疲労感といったらまるで二日に渡る徹夜を敢行したような、いや、そのコンディションで仕事に行かなければならないような――そんな倦怠感だった。
（序文抜粋）

■

土曜日。

疲れた。私は『疲』の字が何故『やまいだれ』なのかを知っている。疲労していることは立派な病気だからだ。

思えば、幼馴染である敦賀（つるが）が亡くなってからまだ半日も経っていない。しかし、この疲労感といったらまるで二日に渡る徹夜を敢行したような、いや、そのコンディションで仕事に行かなければならないような――そんな倦怠感だった。

もっとも、私は彼の死に、そこまでの大きな傷をつけられたわけではない。私と彼は幼馴染であり親友でもあったが、この歳まで友人の死を体験したことがないわけでもない。

確かに、感傷に近い何者かはにじり寄ってくるものはあるが、それがなんだというのだろう。こんな感情は社会人として暮らしていく上で嫌でも体感することであり、誰もが当たり前に乗り越えていくことだ。

私が冷たいのではなくて、ただそういうふうにできているだけ。

だから、警察は親友である私のところにも話を聞きにきたし、それが多少の無遠慮であったからといって私は意に介しない。というよりかは、意に介しないように意識しているというところだろうか。私も大概、未熟である。

警察は馬鹿にするように聞いた。

「自殺をするような人でしたか」

私は答える。

「いいえ」

警察は馬鹿を相手にするように聞いた。

「彼の恋人のすずめさんにはもうお会いになりましたか」

私は答える。
「いいえ」
警察は世の中が馬鹿ばかりであるように聞いた。
「あなたは事件があったとき何をしていましたか」
…失礼な話だ。本当に失礼な話だ。
要するに、私を疑っているのだろう。私はその前日に彼と酒を飲みに行ったが、その後彼は誰にも会わず死んだ。つまり、私は有力候補なのだ。
――犯人というものの有力候補。
と、書くといかにも自殺のように聞こえるので訂正しておくと、彼は自殺だと決まったわけではない。もしかしたら事故かもしれない――とのこと。
その酒の席で何を言ったのか、何を聞いたのかを逐一報告する気はなかった。警察にプライベート意識はないのだろうが私にはあるので警察には当たり障りのないことを言っておいた。それがたとえすずめ相手でも私は会話の内容までは伏せただろうが、それがついさっき来たばかりの無愛想な警察ならばなおさらだ。

とにかく――
平成二十一年十一月十一日土曜日。
彼（本名を敦賀（つるが）　広鳴（ひろなり）という）は、私をタクシーで帰らせた後、数時間街にいたらしい。そして、深夜三時頃にとある中学校前の歩道橋から身を投げた。そこの歩道橋はところどころが錆びていて、例によって身を投げたところは腐食が酷く一部が彼の身体と共に散らばっていたというのだから、よほどの錆だったのだろう。
一方、先ほど述べたように私はタクシーで帰らされていた。家に着くと大量にスポーツドリンクを飲んでそのまま寝ることにした私は日曜日という回復期間に感謝しながら目を閉じてしばらくしてからすずめからの電話で起きたのだった。
「さんちゃん、ひろくんが自殺したって！今警察の人から！ごめ

ん、ごめんね」

私はすずめが何を言いたいのかわからなかったが、とりあえずすずめの近くに行ってやろうと思った。ちなみに、『ひろくん』は敦賀のこと、『さんちゃん』は私のことを指している。私の本名は五味（ごみ）三土（みづち）。他人の名前の読み方が少し特殊ゆえに覚えられない彼女からは『三』の字をとって『さんちゃん』と呼ばれているのだ。私にとっては敦賀の恋人であるすずめも親友であり、幼馴染でもあった。高校生になっても、仕事に就いても、彼らはどこまでも同じだった。だから、私も変わらずに接してきた。こんなところで変わっていい関係のはずがない。たとえ摂理がそういうふうにできているとしても、それは変わっていいものではない。

とはいえ、あまりに酒の匂いがきついので車で駆けつけるにも邪魔が入りかねない。警察というものは妙なタイミングで邪魔をしてくれる。万が一、ということも考え、私はシャワーを軽く浴びた後、タクシーに電話をかけた。

しかしそのときにドアチャイムが鳴り、まさかすずめから訪ねてきたのだろうか、と期待をしてドアを開けると警察がそこに立っていたのだった。

数時間拘束されて茶まで出してやったにも関わらず、彼らがしたことといえば私を疑い不快にさせただけ。警察というものは妙なタイミングで邪魔をしてくれるものだ。

すずめの元に駆けつけようとしてもう一度電話をかけたが、電話が繋がらなかったので諦めてベッドに入ることにした。『眠った』ではなく『ベッドに入った』という表現なのは、私がした行動の表現としてこれ以上ないほど一致したからだ。

あまりに落ち着かないので何度もすずめに会いに行こうと思ったが、電話をしてみて、繋がらなかったのでやめることにした。すれ違いになっても仕方ないし、この三人のことで問題が起こったときには間違いなく当事者以外（この場合、私だ）に連絡がくるはずなのだ。それは三人の中で確立されたプロセスであり、例外はない。

だから、私は連絡がくるまでは待とう。
眠れない夜は慣れているつもりだ。

■　■

月曜日。
果たして、私は一睡もできないまま月曜日を迎えてしまう。日曜日は、連絡がない以上迂闊に家を出るわけにもいかず、小説を読んで過ごすことにした。回復を期待していた日曜日がこのような地獄になるとは思いもしなかったので、場違いながら敦賀とすずめを憎んでしまう。
私は住んでいるアパートの隣にあるコンビニエンスストアで簡単な惣菜を買い、それを口に運びながら小説を読むだけの機械になった。惣菜を買うときに、いつものクセでごまドレッシングのサラダを買ってきてしまったが、たとえ私の嫌いな海草のサラダだったとしても文句も言わず平らげただろう。味なんてわかるわけがないんだから、普段食べないものに挑戦してもよかったかもしれない。これはもちろん、嘘だけれど。
そして連絡がこないまま朝が来て、今に至るということだ。
私はあまり朝が得意な方ではないが、このときばかりは好きになりそうだった。何かを理由にして外出をすることが嬉しいなんて、インフルエンザにかかって出勤停止になったとき以来である。
私は司書をしている。司書という仕事はどうも暇に見られているらしく、同級生に話すと「公務員はいいねぇ」と言われがちである。私はそれを否定する気はないし、どんな仕事にだって辛さはあることを知っているので何も言わない。
ともあれ、暇な日があるのも確かだった。精々忙しいといえるのは月に一度の整理の日だし、そのときに煩雑にならないように週に一度、簡単な片付けをしているので、それがない日にはほとんどの職員は本を読んでいる。私なんかは、一昨日から今日にかけて小説

漬けだったので活字を見るだけで吐き気が起きるかもしれないと危惧していたが、それは杞憂に終わった。家で読むより断然気が散ってくれる上に、たまに客がくるので深く物事を考えられない。それがよかった。それでよかった。

それは読書ではなく一種の美術作品のような、客観視されれば何をしているかはわかるが、彫像本人は何をしているのかわからないような、そういったものであったといっても言い過ぎではないのかもしれない。

いや、自分を芸術作品と称するのは、いささか言いすぎかもしれないが。

十七時半の鐘が鳴り、私は読書をやめた。私は大きく伸びをして、帰る途中の同僚と談笑をした。私の勤務している図書館は市の体育館と同じ建物の中にあるので、図書館自体はすぐ閉まるというわけではない。私はなんとなく、家に帰りたくなくなってしまった。私が外出をしていれば、敦賀は死んでなくて、すずめと手を繋いでいるところを私が見つけて――そんな普通のことを夢見ているのかもしれない。それは一般には逃避といい、あまりにといえばあまりに、原始的な行動だった。

私は、自分がもう少し利口で知的な生物だと思っていたために鼻から笑みが漏れる。笑わせてくれる。

覆水盆に還らず。

零れたミルクを嘆いても無駄。

世界はそういうふうにできている。

■　■　■

火曜日。

さて、私は寝ることに成功した。

その代わり、携帯電話の音量を最大にして耳元に置いておき、すぐ電話に出れるように気合を入れておくという怪行動をしてからで

はあったが。
朝になったので、炊飯ジャーからご飯をよそい玉子を落とした。元気が出ないときの玉子かけご飯である。頭がようやく明瞭さを取り戻してきた気がする。
そのまま簡単にシャワーを浴びて図書館へと向かった。連絡はまだない。
今日も今日で何もない日だった。
なので、皆手元の本に執心していたし、私も例外ではない。私たちは図書館の本など読みつくしているので（あくまで自分が得意とするジャンルのみ、という制約付きではあるが）大体は自分が購入したものを持ってきて読んでいる。私の本日の友は佐藤友也著『フリッカー式』だ。この作者には本当に惚れ込んでしまい、『青酸クリームソーダ』を読んだときから集めている。発売の順序が真逆だが。
一睡の甲斐あって、それなりに集中して読むことができた。私は鏡家でいうと妹さんより綾子姉さんが好きだ。
さて、物書きならぬ物読みである私が普通サイズの文庫を読み終わるのは半日に満たない程度の時間であり、それで残った時間は当然、敦賀のことを考えざるを得ない。
元々、敦賀のことは小学校時代から知っていた。遊んでもいたし、家が近所なのもあり家族も顔を知っているような、そんな友人だったと記憶している。そして中学校に進級して、いくつかの小学校の卒業生が統合されたときに、動作が緩慢な（簡単にいえばトロい）すずめがいじめを受けていた。私は当時から本が好きな明るくもない子ですずめがいなければ私が虐められていたかもしれないぐらいの子どもだった。　とある日、すずめがあまりに反抗せずに従っているので助けてあげたのがきっかけだった。と思う。次のいじめの対象になるのは私かもしれない、と思って翌日の登校が嫌になったが、明るくリーダーシップをとるタイプだった敦賀がそれを厳しく律したらしく、私は奇跡的にそういう対象にならずに済んだ。

そしてまるで刷り込みでもされたスズメのように私についてきたすずめは敦賀と出会うのだが、そこから先は知らない。彼らがどういう段階を踏みながら恋愛を発展させていったかはわからないし、いくら親友とはいえそれは知りえない情報だった。

もっとも、私たちは高校を卒業して五年が経つが、彼らが性行為をしたのはつい最近と聞いて、純粋さに失笑したぐらい彼らの間については知らないのだ。

いじめがなくなってからのすずめはまさしく女神のような笑顔を有していたために、確かに、敦賀でなくても惹かれていただろう。助けたアヒルの子が白鳥になる様は身近で見ていて嬉しくなった。敦賀と付き合い始めたことを私に報告するときの赤い顔をまだ覚えている。彼女は本当に無垢に笑う。『ツル』と『スズメ』で、半ば無理やり『おしどり夫婦』という洒落をつけてからかっていたが（鳥の種類がまったく違うことに気がついたのは数年後だ）、近い将来それが本物になることも予測できたので微笑ましくなった。奥歯の奥から唾液が出そうなほど微笑ましかった。この表現は少し怖いか。

ああ、そういえば。

敦賀が落ちたあの歩道橋は私たちが通った中学校の前にあった。忘れていたわけではないが忘れたかったのだろう。私は帰りにそこに立ち寄ろうと考えた。線香や花を買っていこうとも考えたのだが、それをしてしまうと彼が二度と戻らない気がしてそれはやめておいた。とんだ感傷である。片腹痛くもある。だが、感傷があるのが私なのだ。私はそういうふうにできている。

敦賀のことのついでにふと思い出すと、「そういうふうにできている」はすずめの口癖だった。確か、いじめられて痣だらけでトイレから出てきたときも「いいの、そういうふうだけにできているから、私は平気」などと、まるで平気なように言ってのけるのだ。私

は心の底で落胆をしたが、それ以上に加虐心をも受け止めるその態度が気に入ったので私もままならないことがあるときはその言葉を使っている。

さて、仕事が終わり飲み会を断った私は、すぐ件の歩道橋まで向かった。この決意が揺らいでしまうと、私の役目がなくなるような、そんな焦燥に駆られたから、というと聞こえはいいが、情報が入ってこなくて苛々していたのだろう。そういえば私には新聞を見る習慣がないので気にしていなかったのだが、葬儀だとか諸々あったはずなのだ。それらを私は出ずに部屋の中で小説を読みふけっていたのか。今思えば、その手伝いですずめは私に連絡できなかったのではないだろうか。その手伝いさえできなかった。私は自己嫌悪に陥ったが、しかし過ぎてしまった事は仕方がない。

私が死んでも葬儀はやらないでほしい、と心中密かに思っているが、敦賀がそう思っているとは限らない。完全に手落ちだ。もっとも、私の性格からいけば、彼の葬儀に参加しなかった理由は、今、線香や花を持っていない理由と同一である可能性が高いのだが。

近くのデパートに車を停めると、歩いて現場まで向かう。中学校に停めることも考えはしたが、この事件で疑われている私が無闇に姿を現すと捜査を撹乱してしまうかもしれない。それは百害あってなんとやら、である。だから私はできるだけ目立たないような、それでいて『目立たないこと』を強調しない姿で歩道橋に登ってみた。つまりは普通のスーツ姿だが。

今は軽く補修されてしまっているそこが、おそらく敦賀が落ちてしまったところなのだろう。少し身を乗り出して下を覗く。大した高さではないが、人が死ぬには十分なのだろう。もう跡は残っていないが、感覚として、そして供えられた花によって、ここで失われた命があることはわかった。

…こんなことなら線香を買ってくるんだった。

私はそう思い直して車を停めたデパートまで買いに歩道橋を降り、

ようとした。
「あっ、さんちゃん…」
そこにはすずめがいた。こちらを見つめるその目から無垢さをまだ感じさせる。
「ごめん、ごめんね。びっくりさせようと思ったわけじゃないんだけど」
いつもどおり、もじもじしているすずめ。
そうじゃないだろう。
「…いいよ、気にしないで。さっき、下を見てた時ならびっくりして落ちてただろうけど」
冗談のつもりで言ったつもりだったが、少し不謹慎らしく、あはは、と言って流すすずめだった。気まずい。
「葬儀とかいけなくてごめん」
私はまず謝った。私に対して怒るすずめをまだ見たことがなかったけれど、それはそれ。悪いことをしたら謝るのが当然なのだ。
「えっ、ううん、わたしも、行ってないよ」
さも当然といった風に答えるすずめ。
「え…っ。あんたが行かないのはちょっと…」
私は友達だから、精々友達だからまだいい。でも恋人なんだから――そういった意味を含ませて発言をした。
「わたしは、まだ信じてないの」
気持ちはわかる。
「わたしは、トロくって、ドジだから、わかるのに時間がかかるの」
気持ちはわかるが――
「だから、わかったときに、ぜんぶおあずけ。泣くのも、後悔するのも。」
そうじゃないだろう。
私は激昂しそうなのを抑えて、彼女のバッグを指差した。
「そんなかに、線香とかある？」
「ううん」

「そっか」
どうやら彼女も同じ理由なのだろう。

■■■■

水曜日。
結局私はあれから、少し話をして帰った。
私もすずめも、彼の死を心から信じていないので、まるで仮定の話をしているようで身が入らなかったことだけは覚えている。
そして、彼女が敦賀から渡された指輪を外していたことも、また覚えていた。
敦賀と付き合ってからずっとしていた指輪。
それは、何を指すのだろう。
別れ、ではない。彼女はまだ敦賀が生きていると信じている。生きているとは思っていないだろうが、死んでいないことを信じている。
そして、彼女が敦賀を嫌いになることは、ない、と思う。たぶんそうであるはずだ。あんなにお似合いのツガイはそうそういない。
わからない。
私は彼女ではないし。
ましてや、彼らの関係のおまけである私には。

私は図書館に置いてある、土曜日の新聞に目をやった。
もちろん、知っている名前が黒い枠で囲まれていて、それは実感足りえるものだったが、敦賀との思い出がこんな活字にわかってたまるものか、と思うと、その新聞から伝わってきた情報は何もないように思えた。
それでも私はずいぶんと取り乱してしまったらあしく、同僚から水の入ったコップをプレゼントされてしまった。
指摘されて始めて気付いたが、顔色が悪いらしい。

私は愛想笑いをして、平気だと伝えた。
社会人とはこういうふうにできている。
そう思えば、楽なものだった。
私は何もする気が起きず、十七時半になるとすぐさま帰った。
なんとなく、活字が嫌いになりそうだった。
二日間小説を見続けたときですら、そんなことはなかったのに。
まったく、いい八つ当たりである。
くだらない。
私は夜ご飯も食べずに床に就く。
明日起きたら幸せになっていますように。
明日起きたら幸せになっている、そんなふうに世界ができていますように。

■■■■■

木曜日。
朝である。
昨日の晩、泣き虫だと思っていたすずめは弱音も疲労も見せず、ただ私を家に招いて料理を作ってくれた。
それから、くだらないことを話し合った。
すずめとは中学校、高校を共にした。その後、彼女は北海道で一番の大学に進学してしばらく地元を離れていたが、私への連絡は欠かすことがなかった。なにかあればすぐ電話が鳴っていたし、私もそれが楽しみだった。なにせ、いちいち鳥の巣を見つけたくらいで面白おかしく電話をしてくるのだ、楽しくないわけがない。
ちゃんと私が忙しいときには後から電話をかけてくれるし、それが負担になることはなかった。一方、敦賀といえば同じ大学に通って完全に悪い虫を寄せないようにしていたのだから、恐れ入る。
彼女が昨年、就職したのは製菓会社だった。理由は「甘いものが好きだから」で、彼女の成長は豊満な胸だけだったのだろうかと思

わせる理由だった。
一方、敦賀は流石に同じ勤務先とはいかず、市の職員になった。倍率は三十倍を超えていたらしい。流石である。
元々、笑えば誰でも微笑ましくなる女神みたいな子なので、虐められているだとかはないそうだ。別にドジだからといって、何もないところで躓くわけでもないし、お茶汲みだって笑顔でやっているので受けが悪いわけがない。女性連中とも裏表なく付き合っているので派閥はあるだろうが、概ね問題ないようだ。
私は安心しながら料理を摘む。小さくて一口でそのまま飲み込めるような色とりどりのシュウマイやそれに類するものが並んだ豪勢な料理だった。塩味が安定しない彼女の料理に改善の余地はありそうだが、しかし酒の肴にするには最良とも思えた。

繰り返すが、朝である。
ずぼらな性格の私はどうやらすずめの家で一夜を明かしたらしく、鳴る携帯の音で起きた。
『件名：起きてますか
本文：わたしはバスがなくなるので先に家を出ました。起こそうと思ったけど、さんちゃん、起きないので、おにぎりを食べてね。鍵は外の鉢植えに置いておいてください』
いまいち文章がしっくりこないのはよくあることなので、私はおにぎりを食べながら時間を確認した。八時。間に合わないわけではないのでゆっくりとおにぎりを食べてシャワーを借りた。勝手知ったるなんとやら、である。
そして私はメールを打つ。
『件名：起きました
本文：ありがとね。おにぎりうまかったよー。ちなみに鍵は私が誘拐したので、取り返したければ十九時まで会社にいなさい。以上。
』

図書館に着くと、すでに皆が動き出してしまっていた。やはりギリギリで出社はよくないなぁ、と思いつつ新刊が追加されたので作業を手伝う。
元々やる事がすくない司書の仕事のことなので、ミステリの棚を任せてもらう。これはもちろん、私が見たい本があるかどうかのチェックも兼ねている。西尾維新が入荷されたのはいいが、全て読んでしまったので私としては嬉しくない。お、『六とん』シリーズが入荷されている。とりあえず読んでおこう…

こうして、午後からの友を見つけた私は手元に没頭していく。

十八時。
ぞろぞろと退社をしていく皆を眺めつつ、誰もいなくなったところですずめの家の鍵があるのを確認して上着を着る。
そしてあの中学校があるデパートで線香と花を買った。
途中、ライターを買うのを忘れたかと思ったが、線香の箱に付いていたのを思い出して車を飛ばした。目指すはすずめの勤める製菓会社だ。
ふと、腹痛が起きる。緊張なのだろうか。
「あっ、さんちゃん」
私の真っ赤な車は、車に全く興味がないすずめに私の車を覚えさせるために買ったといっても過言ではない。それなりに値は張るが、赤い車を見たら私だと思え、という指導の下ようやく判別がつくようになった。（余談だが、街中ですずめを見かけたときに知らない赤い車の人に手を振っていた気がする。私は優しさ故にその場を立ち去った。）
「図書館から遠いよね。ごめん、ごめんね。鍵なら私の家に置いてくれれば…」

そういって隣に乗りシートベルトをするすずめ。
「んーん、ちょっと一緒に行きたい所、あるから」
私はそれだけ言って、発進させる。

着いた先は敦賀の家だった。
ここに来るまで泣いたりするのかも、と思ったがそうでもなく、ただしゅんとした表情になっていた。しかし、いつまでも逃げられる問題でもない。
「失礼します」

無事に葬儀上最低限の礼のみしてから、私たちはまた外に出る。
「…なんで？」
「…なにが」
「…わたし、まだ信じてないって言ったのに」
「…信じる信じないの問題じゃないでしょ」
「…ひどいよ」
「…ああ、ひどいね」
そういってまた隣のシートに座るすずめ。
そして私は先ほど停めた、デパートの駐車場にまた停車した。
「…外行くよ」
「…うん」
歩道橋の傍に持ってきた花を添えた。行為そのものはすずめのためではあったが、私にも同時に湧き上がる感情があって、ついには泣き出してしまった。
私は震える手で線香をつけると、すでに誰かが持ってきていた灰入れにそれを挿す。そして顎ですずめにそれらの反復動作を指示して、私はまた押し黙る。
しばらく雲が流れて雨が降りそうだった。私は歩道橋に上ることを提案する。歩道橋には申し訳程度の屋根があるからだ。すずめは同意はしなかったものの私の後ろをついて歩く。

「…わたし、ね」
「…うん」
「あのとき、一緒にいたんだよ。ひろくんが飛び降りる前」
「…うん。だと思った」
「そっか。それでね、呼び出されて、他の人を好きになったかもしれないって」
「…うん」
「わたし、わかっちゃったの。普段は頭悪いくせに、こんなときだけわかっちゃうの」
「…すずめ」
「うん、きっとそう。ひろくんが、好きな人はさんちゃんなの」
「…すずめ」
「だって、それ以外ないんだよ。でも、わたし、ひろくんのこと、すきだから、『子どもができたの』って言ったの」
「…」
「そしたら、やっぱりわたしの手を取って『今のは違うんだ。結婚してくれ』って。やさしいひろくん。わたし、大好きだよ。今も好き。ひろくん」
「…」
「でも、それは愛情じゃなくて。ただの同情でしかなくって。わたし、子どもできてるかどうかもわかんないけど、ひきとめたくて」
「…」
「でも、そんな感情じゃなくって、子どもができたから、って理由じゃなくて、わたしとさんちゃんは、どっちも大事なのに、自分の気持ちに嘘をつくひろくんは、好きだけど、違うの」
「…」
「私は、その握られた手を離しちゃった。それで、それでね、私は家で泣いてたら、ひろくんが」
彼女は泣かない。
「わたし、まだ死んでないって信じてた。ひろくんは死んでない。

ひろくんはひろくんのままだって。それなら、よかったの。わたし、頭悪いから。それでいいの。このまま死ぬまでひろくんはどこかで生きてるって思うだけでよかったの。わたしはそういうふうにできてるから」

「…」

そういうふうにできているか。

「でも、今日、わたしの中でひろくんが死んじゃったの！いくら責められてもいい！さんちゃんのせい！いくら後悔してもいい！生きていれば、生きてさえいればよかった！わたし、さんちゃんが憎いの！憎くて憎くて憎くて

金曜日。今日は祝日。
十二月がすぐそこまで来ていることを雪の音で知った。
私はといえば玉子かけご飯を食べるか小説を眺めるかの機械にまた戻ってしまった。もちろん仕事がある日は行くだろうし、談笑もするだろうが、どこか身が入らないだろう。今の私のように。
あの後、病院に運び込まれたすずめはまもなく息を引き取った。不謹慎だが、よかった、と思う。逆に息を吹き返したら、全てが残酷で、棘だらけのこの世界では生きていけないだろう。死ぬこともできないはずだ。
私はこの土曜日をベッドの上で小説を読むことに費やしていた。そういえば、敦賀が亡くなってから一週間しか経っていない。なるほど、たしかにそれだけの期間と言われればそれだけの期間だし、長すぎると思えば長すぎる。所詮、そんな程度の出来事なのだ。

私は、彼女が飛び降りる前に「やめて」と言った。
だがそれは彼女が死ぬのを引き止めたかったのではない。むしろ、なにもわからないうちに死んでしまっては可哀想だから、一旦引きとめようと思ったのだ。
明かしてしまえば、敦賀は私のことをただの親友と思っていなかったと思う。というのも、色目を使ってきたとか、彼から浮気をしようとしていたわけではなく、私から誘ったからだ。
この関係は元々、高校生の頃に私が手を出していたし、彼らが地元に就職してからも丸一年、身体のみの関係を続けていた。彼は久しぶりに飲みにでも行かないか、と言って私を誘ったので、私はちょっとツマミグイをした。それだけだ。
もちろん、すずめに対する嫉妬もあった。
私が先に目をつけた男だった。
私が虐めから救ってあげた。
私が笑顔を与えた。
なのに、なんだこの差は。

おかしいだろう。
アヒルが白鳥になった。
私は醜いアヒルのまま。
白鳥は、ちやほやされて。
アヒルは笑いもの。
おまけに「わたしとさんちゃんはどっちも大事」。
違う。
白鳥が上にランクされているのに。
綺麗な白鳥と醜いアヒル。
――同列に並べるのは、酷ってもんだろう。
彼女は言った。
「あのとき、一緒にいたんだよ。ひろくんが飛び降りる前」
私は知っていた。
彼女は電話で、「さんちゃん、ひろくんが自殺したって！」と言っていたときから知っていた。
あの時点では、自殺か事故のはずだった。なぜ自殺、とだけ云ったのか？その原因を自分が作ったと思い込んでいたから。

私は敦賀に言った。
「子どもができたの」
敦賀は慌てていたが、元々明晰な男だから。
だから、大好きなすずめを傷つけないように、呼び出して「他に好きな人ができたかもしれない」と言ったんだろう。
だからすずめが「子どもができた」時には改心して、すずめを優先したんだろう。
でも、すずめは「トロくって、ドジだから、わかるのに時間がかかる」から。
早とちりしたまま、逝った。
悪いのは私じゃないか。
あの子は死ぬ必要なんかなかった。

私を憎んで憎んで憎んで

まさか。
ばかなすずめじゃあるまいし。
ふと、腹痛を感じる。あのときと同じ。
いったいなんだというのだろう。
身に杭を打たれたような。

さて、疲れた。私は『疲』の字が何故『やまいだれ』なのかを知っている。病気であることは疲労でしかないからだ。

了

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4705k/

---

身に杭、アヒルの仔

2010年10月8日11時49分発行